

論 文

資本制システムの複合性の再発見

—アミンの世界資本主義論の構造と問題点—

若 森 章 孝

はじめに

エジプト出身の経済学者、サミール・アミンは、一方ではアルチュセール学派の『資本論』の新しい読み方に刺激されながら、他方では「低開発の発展」という発展途上国の資本主義発展の「異質性」の理論化を志向しながら、マルクスの資本主義認識から西欧中心主義的要素を除去しようとする。彼の思想と理論が共感を呼んだのは、20世紀末の現代そのものが「固有の自律的発展の条件を奪われて低開発状態におかれてきた諸民族に認識の原点をおくような、歴史像の再構成」(森田桐郎[1979]22ページ)を要請しているからであろう。

アミンの研究対象は、彼の理論的到達点と思われる『階級と民族』の序文で述べられているように、次の三分野にわたっている。

- ・唯物史観の再解釈
- ・世界的規模での資本蓄積論
- ・第三世界の「低開発の発展」の現状分析 (Amin S. [1979] p. 7, 邦訳1ページ)

このような三分野にまたがる彼の研究が体系化されるのは、1970年に刊行された『世界的規模における資本蓄積——低開発理論の批判——』(Amin S. [1970])においてである。この大著は、『世界資本蓄積論』(1979年)、『周辺資本主義構成体論』(1980年)、『中心—周辺経済関係論』(1981年)の三分冊で柘植書房から刊行され、アミン理論の全体像が欧米やラテンアメリカよりも約10年遅れて日本のわれわれの前に開示された。彼はこの本の中で、周辺資本主義構成

体論の構築によって、資本制的生産様式が專一的に支配する中心部の諸社会にのみ妥当する『資本論』の分析を補完し、さらに、中心資本主義と周辺資本主義から構成される世界資本主義システムを構想する。「世界資本主義システムは、抽象的にすら、資本制的生産様式に還元されえない」（Amin S. [1970] p. 13, 第一分冊17ページ）のである。

アミンの世界資本主義システム論は、1960年代後半にラテンアメリカやフランスにおいて展開された一連の問題提起と斬新な仮説を総括しようとするものである¹⁾。「低開発の発展」というフランク・テーゼの核心をなす中枢／衛星命題、中心部による余剰収奪の経済的メカニズムを解明しようとするエマニュエルやパロワの不等価交換論²⁾、フランスのレーやデュプレなどの経済人類学派の接合理論³⁾、アリギの周辺資本主義に独自の労働市場論⁴⁾といった、鋭い問題意識に裏打ちされた新しい理論的命題が、アミンの『世界的規模における資本蓄積』において独自の視角から総合されている。この独自の視角とは、これから見ていくように、周辺資本主義の形成を特徴づける本源的蓄積論である。

以下、マルクスの『資本論』の諸概念とアミンによるそれらの再定義の試みとの緊張関係に内在して、アミンの世界資本主義システム論の構造と問題点を解明することにしよう。われわれの関心は、アミンがマルクスの方法を使ってマルクスを超えるという冒険をどこまでやっているか、という点にある。それゆえ、アミンの理論の限界や問題点もまた、マルクスの方法を使ってマルクス

1) 従属理論の問題提起とその主要な理論展開については、Brewer [1980], Chilcote [1984], Corbridge [1986], 原田金一郎 [1982], 本多健吉 [1986], 本山美彦 [1982], Polychroniou [1991] を参照されたい。

2) 不等価交換論については、Emmanuel et al. [1971] を参照のこと。

3) 接合理論については、Foster-Carter [1978], 望月清司 [1981b], 室井義雄 [1984], Ruccio et Simon [1986], 若森章孝 [1982], 山崎カヲル [1980a, b] を参照のこと。

4) アリギの所説については、Arrighi [1970], Brewer [1980] を参照のこと。

を超える試みが不徹底であること、不十分であること、という観点から検討される。

1 世界資本蓄積論の理論構造

アミンの世界資本蓄積論は、北の「開発」諸国と南の「低開発」諸国との国際的不平等の問題に、すなわち、資本制的生産様式の専一的支配に還元できない世界資本主義システムの領域に『資本論』の本源的蓄積論を適用し、南北格差の拡大と南の「低開発」を批判的に解明しようとしている。彼は、「2 非西欧的原蓄論の試み」で詳しく検討するように、本源的蓄積論の概念を「前資本制的生産様式から資本制的生産様式への価値移転」(Amin S. [1970] p.14, 第一分冊18ページ)として定義し、この意味での本源的蓄積論の概念を世界資本主義システムの中心／周辺関係に適用する。言い換えれば、アミンは、非資本制的生産様式からの金銀・労働力・資源の収奪というマルクス本源的蓄積論の「対外的契機」をふくらまして理解することによって、『資本論』の中に現代の第三世界研究のための理論基軸を再発見するのである。

本源的蓄積をこのように理解するならば、それは、人びとの記憶から消えてしまった遠い過去である「資本主義の前史においてみられるにとどまらず、現代史においてもまた追求されるべき研究対象なのである」(Amin S. [1970] p. 220, 第一分冊188ページ)。なぜかといえば、「様相は一新されてはいるが、執拗に中心部に有利に働く資本の本源的蓄積の諸形態」(Amin S. [1970] p. 14, 第一分冊18ページ)は、現代においても、世界資本主義システムの中心／周辺関係を基本的に規定しているからである。蓄積を世界的規模で見ると、中心部の資本制的蓄積(=拡大再生産)と周辺部の本源的蓄積とが同時平行的に展開しているというのが、アミンが描いている世界資本蓄積論のイメージである。

アミンがとくに分析の力点をおいているのは、独占資本主義と資本輸出の段階における本源的蓄積のメカニズムである。彼は、中心部で自由競争が独占に転化して以降、中心部の独占的セクターと資本輸出によって周辺部に創出され

た輸出セクターとのあいだで、生産性がほぼ等しいにもかかわらず大きな賃金格差が発生したこと——この事実を彼は「本質的事実」と呼ぶ——を指摘し、生産性格差がないのに賃金が不均等であるというこの事実から、周辺部から中心部への価値移転を説明する。この価値移転が、本源的蓄積の現代的メカニズムとして位置づけられている「不等価交換論」の実質的内容である。アミンの例証によれば、1969年度における「低開発」諸国からの輸出総額は350億ドルであるが、もし周辺部の労働賃金が中心部のそれに等しいとするならば、輸出総額は570億ドルでなければならず、「不等価交換のメカニズムによる周辺部から中心部への隠された価値移転は約220億ドルにのぼる」(Amin S. [1970] p. 109, 第一分冊93ページ)のである。

さらにアミンは、「生産性が等しいのに賃金が不均等になる＜なんらかの理由＞があるとするれば、それはいかなるものであろうか」と問い、「この質問に答えるために、現存する中心資本主義および周辺資本主義の経済的社会構成体の性格を明らかにする」(Amin S. [1970] p. 110, 第一分冊94ページ)という課題を自ら設定する。この課題の解明が世界資本蓄積論の最大の目標である。彼はこの課題に答えて、中心資本主義と周辺資本主義の対照的な性格をつぎのように特徴づける。「中心資本主義の具体的な経済的社会構成体は、つぎのような明確な特質をもっている。つまりそこでは、資本制的生産様式が支配的であるのみならず、その発展が内部市場の拡大にもとづいているがゆえに、専一化する傾向をもっている。それゆえ、中心部の経済的社会構成体では、……前資本制的生産様式の解体がいよいよ決定的なものになる。これにたいして、周辺資本主義構成体はつぎのような特徴をもっている。つまりそこでは、資本制的生産様式は支配的であるけれども、その支配は専一化傾向をとまなわない。というのは、周辺部においては、資本主義発展が外部市場にもとづいているからである。その結果、前資本制的生産様式は解体するのではなく変形されて、……支配的な生産様式、すなわち、資本制的生産様式に従属することになる」(Amin S. [1970]pp. 77-78, 第一分冊 66-67ページ)。

このしばしば引用される著名な一節から明らかなように、世界的規模での資本蓄積に本源的蓄積概念を適用するというアミンの方法的視角も、本源的蓄積の現代的メカニズムの解明としての不等価交換論も、前資本制的生産様式が解体されず資本制的生産様式に従属的に接合されるという周辺資本主義構成体の独自の編成に根拠をおいている。この独自の接合のあり方が、中心部と同質の近代的技術を用いる周辺部の輸出セクターに低賃金労働力を提供するのである⁵⁾。しかも、この前資本制的生産様式の残存と従属という周辺資本主義の特徴は、「外部市場」にもとづく資本主義発展から、端的に言えば、「強力な外国産業との競争」（Amin S. [1970] p. 270, 第二分冊32ページ）という資本主義一般の論理によって説明されている。アミンにあっては、表1に整理したように、本源的蓄積、外国産業との競争、帝国主義と資本輸出、という概念装置が三者一体となって、世界資本主義システム論の構造を構成しているのである。つき

表1 世界資本蓄積論の論理構造

概念装置 分析対象	本源的蓄積論	資本主義一般の論理 (外国産業との競争)	帝国主義 (資本輸出)
世界資本主義 システム (中心/周辺関係)	本源的蓄積の諸形態 「発展」対「低開発 の発展」	<ul style="list-style-type: none"> 世界市場の形成 農村共同体の解体 →商品経済の形成 手工業の解体 	不等価交換 (本源的蓄積の現代的メカニズム)
中心資本主義構成体	中心資本主義への移行 (西欧的原蓄)	<ul style="list-style-type: none"> 内部市場にもとづく自己求心的蓄積 資本制的生産様式の専一化傾向 	資本輸出→周辺部に資本制的生産様式の普及
周辺資本主義構成体	周辺資本主義への移行 (非西欧的原蓄)	<ul style="list-style-type: none"> 外部市場にもとづく外向的従属的蓄積 前資本制的生産様式の残存 	<ul style="list-style-type: none"> 中心部のための輸出セクター創出 慢性的過剰人口→低賃金労働力の供給

5) アミンは『世界的規模における資本蓄積』ではアリギの所説に従って、周辺資本主義に独自の慢性的過剰人口の存在から低賃金労働力の供給を説明したが、『階級と民族』では、レーの生産様式接合理論に従って、低賃金労働力の供給を労働者の搾取と農民の搾取の接合関係から説明するようになる。本稿「3 生産様式接合理論の採用とアミン理論の確立」を参照されたい。

に、マルクスの諸概念とアミンによるその再定義との緊張関係に焦点を絞って、世界資本蓄積論に内在し、その論理構造に含まれる問題点を検出することにしよう。

2 非西欧的原蓄論の試み

最初にアミンが『資本論』をどのように位置づけているかを確認しておこう。彼は『資本論』と自分の世界資本蓄積論との関係について、つぎのように言及している。

「『資本論』は経済的社会構成体の一般理論ではなく、資本制的生産様式の理論である……。したがってマルクスは、世界的規模における資本蓄積のかんする理論〔世界資本蓄積論〕を扱っているのではない。この理論は『資本論』では資本制的生産様式の前史としての本源的蓄積にかんしてのみ現れる。だが、この前史が終了してしまったわけでは決してない。それは、世界的規模における資本主義発展を通じていまだに継続している。資本制的生産様式の特徴である資本蓄積のメカニズム、すなわち拡大再生産と平行して、本源的蓄積のメカニズムが機能しつづけており、このことが世界資本主義システムにおける中心／周辺関係の特徴となっている。〔しかし〕……マルクスはこの問題にかんする研究をおこなわなかった」(Amin S. [1970] pp. 78-79, 第一分冊67ページ)。

この一文は、なぜアミンが世界資本蓄積論を構想したかを端的に語っている⁶⁾。この構想の基礎にあるのは、第一に、世界資本主義システムの中心／周辺関係を凝視するならば、20世紀末の現在においても資本主義の「前史」は終了していない、という絶対に譲れない同時代認識であり、第二に、マルクス以後のすべての経済学がこの中心／周辺関係の考察を怠ってきたことにたいする批判意識である。しかし、資本制的生産様式の理論である『資本論』はこの問

6) マルクスが世界資本主義システムの中心／周辺関係の研究を実際におこなっていれば、「イギリスのインド支配」にかんする彼の楽観的な評価は生まれなかったであろう、とアミンは指摘している。

題をそれ自体として扱っていないとはいえ、この問題を考えるための手掛かりを残している。すなわちアミンは、『資本論』からまったくかけ離れたところで「低開発」問題を理論化している人びとは違って、マルクスの本源的蓄積論に準拠し、その射程距離を現代まで拡大することによってこの問題を理論化しようとしているのである。まことにアミンの世界資本蓄積論は、「マルクス原蓄論の現代的活性化の試み」（望月清司[1982]91ページ）なのである⁷⁾。

だが、通説的なマルクス解釈によれば、本源的蓄積とは「労働者と労働諸条件との分離」という資本主義の前提条件を作り出す歴史的分離運動であって、ひとたびこの前提条件が確立するや否や、資本主義の前史は終わり、資本主義は国家権力や土地所有者の助けを借りずに純粋に経済法則だけで発展してゆくものと考えられている。このような通説からすれば、資本主義の前史がかたちを変えて現代史においても貫徹していることを力説する世界資本蓄積論は、時代錯誤の主張にすぎない。しかし、アミンの見解によれば、資本主義が資本主義であるかぎり、世界的規模での資本主義の展開は、自由な賃労働者から領有する剰余価値にもとづく本来的資本蓄積（=拡大再生産）だけでなく、非資本制的生産様式から搾取という本源的蓄積の諸形態を消滅させることはできないのである。彼がとりわけ注目するのは、『資本論』第一部第24章「いわゆる本源的蓄積」、第6節「産業資本家の創世紀」にある以下の叙述である。

「アメリカの金銀産地の発見、原住民の掃滅と奴隷化と鉱山への埋没、東インドの征服と略奪の開始、アフリカの商業的黒人狩猟場への転化、これらのできごととは資本制的生産の時代の曙光を特徴づけている。このような牧歌的な過程が本源的蓄積の主要契機なのである。これにつづいて、全地球を舞台とするヨーロッパ諸国の商業戦が始まる。それはスペインからのネーデルラントの離脱によって開始され、……シナにたいする阿片戦争などで今なお続いている」（Marx K. [1968] s. 779, 第四分冊1, 143ページ）。

7) 従属理論によって提起された本源的蓄積論の現代的意義については、望月清司 [1981 a], [1981c], [1982] を参照されたい。

「植民地は、成長するマニファクチュアのための販売市場を保証し、市場独占によって増進された蓄積を保証した。ヨーロッパの外で直接に略奪や奴隷化や強盗殺人によってぶんどられた財宝は、本国に流れこんで、そこで資本に転化した」(Marx K. [1968] s. 781, 第四分冊1, 147ページ)。

アミンが「資本主義前史に固有な形態(財宝の略奪, 奴隷貿易など)は、植民地経済の<古典的>形態(鉱山開発)へと引き継がれ、やがて新古典的形態(周辺部への全軽工業の割当とその中心部の重工業への従属化)へと継承され」(Amin S. [1970] p. 222, 第一分冊190ページ)、さらに、現代の科学技術革命とともに新しい国際的特化の不平等が生まれつつあると指摘するとき、彼は『資本論』の「本源的蓄積」章の上記の叙述を現代資本主義の世界的展開を照射する基底的な論理として再発見しているのである。また、彼自身は意識していないと思われるが、彼は中期マルクスが『経済学批判要綱』において展開した本来的資本制的蓄積と本源的蓄積との「同時平行説」を、すなわち、資本の母国である西ヨーロッパにおける拡大再生産=資本蓄積と非西欧的地域からの原料や資金の暴力的調達とが同時に進行する過程を捉えたマルクス世界市場論を、事実上継承しているのである⁸⁾。要するにアミンは、世界資本主義システムを中心資本主義と周辺資本主義とに区分し、この中心/周辺関係を本源的蓄積論によって理論化しようとしているのである。

さらに、資本制的生産様式は非資本制的生産様式を解体し支配することによって発展するという、本源的蓄積の「対外的契機」を強調する点において、アミンはローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』を継承する⁹⁾。だからといって彼は、独占資本主義を資本輸出によって特徴づけるレーニンの段階規定を無視するのではない。むしろ彼はレーニンの帝国主義論の意識的な継承をめざし

8) 『要綱』のマルクスにおける、資本制的蓄積と本源的蓄積との「同時平行説」については、平田清明 [1971] 第1章「循環=蓄積論と歴史認識」を参照のこと。

9) ローザ・ルクセンブルクの帝国主義論については、松岡利道 [1988] を参照されたい。

ているといってよい。彼のねらいは、中心／周辺関係という純粋な経済関係に還元できない問題領域に本源的蓄積の論理を適用することによって、レーニンの帝国主義論を補完することである。この点から見れば、アミンの世界資本蓄積論は、マグドフが『帝国主義』において指摘したレーニン帝国主義論の空白を、すなわち、「帝国主義的列強の支配がその植民地・半植民地・勢力圏におよぼす、政治的・経済的・社会的影響についての問題」や「中枢＝周辺関係にたいする関心」(Magdoff H. [1979] p. 100, 103, 邦訳102, 105ページ)の欠落を埋めるものである。アミンは、帝国主義段階において資本主義が、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの周辺部に外部からどのように植えつけられ、そのことを通じて周辺部の社会構造がいかに変わったかという問題に、すなわち、周辺資本主義固有の形成問題に真正面から挑んでいるのである。

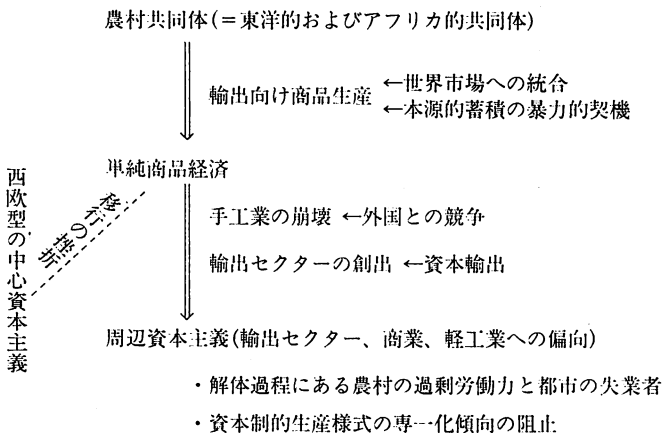
要約すれば、アミンの世界資本蓄積論の方法的な特徴は、純粋資本主義の論理では容易に理解しがたい中心／周辺関係を本源的蓄積論の現代的活性化によって理論化しようとしていることにあり、その理論的成果は、レーニン帝国主義論の分析上の空白を埋めていることである。

さて、アミンはどのように『資本論』の本源的蓄積論を現代化しているのだろうか。アミンの本源的蓄積論の特徴は、封建制から資本主義への移行という中心資本主義の成立過程——この移行を分析した『資本論』の本源的蓄積論を西欧的原蓄論と呼ぶことにする——に対比させて、周辺資本主義への移行という非西欧的原始的蓄積の諸契機を解明しようとしていることである。彼は、本源的蓄積論を周辺資本主義の労働市場分析に適用したアリギの先駆的な研究に学びながら、「周辺資本主義への移行」という理論領域を世界資本蓄積論のなかに設定する。この理論領域こそ、彼の世界資本蓄積論を支える理論的支点であり、西ヨーロッパ中心主義ないし単線的歴史観と彼が名づけているものを批判する基準となるものである。その意味で、『世界的規模における資本蓄積』の第2章「周辺資本主義諸構成体」の第1節「周辺資本主義への移行」は、非西欧的な本源的蓄積論の展開というきわめて野心的な試みである。マルクスが

その本源的蓄積論によって資本主義の起源についての神話——例えば、賃労働者が現在、生産手段から切り離され、資本家の支配下で労働しているのは、過去において彼らないし彼らの祖先が怠惰で浪費家であったからである、といった神話——を解体させたように、アミンはその非西欧的原始的蓄積論によって周辺資本主義にかんするさまざまな「低開発神話」を解体しようとする。資本制システムの発生的叙述としての本源的蓄積論は、いつの時代にあってもきわめて論争的な性格をもっているのである。このような意義を担っている「周辺資本主義への移行」論は、

- 1 商品関係の誕生—自給経済から商品経済の移行
- 2 外国貿易(植民地貿易)にもとづく資本主義の形成
- 3 外国資本投資にもとづく資本主義の展開

という、周辺資本主義の創生にかかわる三つのメカニズムの分析から構成されているが、ここにはこのありきたりな表題からは伝わってこないような、アミン理論にとって決定的な論点が書かれているのである(Amin S. [1970] pp. 241-287, 第二分冊 10-45 ページ)。アミンの理論展開は、きわめてで難解で容易に理解を許さないものになっているが、以下、錯綜した叙述を整理した図 1 にした



がって、この三つのメカニズムの相互関係を検討することにしよう。

周辺資本主義への移行とは、結局、非商品的な前資本主義構成体にたいする資本制的生産様式の浸透過程のことにほかならない。本源的蓄積の第一のメカニズムは、村落共同体の活力である「土地利用にたいする全村民の権利」（Amin S. [1970] p. 250, 第二分冊17ページ）を解体し、伝統的農民を輸出向け商品の生産者に転化するための諸契機から構成される。第一のメカニズムを実現するために、貨幣による納税義務、輸出向け作物の強制栽培などの「政治力」、すなわち、「純粋かつ単純な暴力に依存する手段、つまり、本源的蓄積の手段」（Amin S. [1970] p. 250, 第二分冊17ページ）が行使されたのである。本源的蓄積の第二のメカニズムは、外国製品との競争による伝統的手工業の解体と外部市場での競争による現地の資本主義発展の挫折から構成されるが、重要なことは、現地の資本主義発展の挫折のために、解体した伝統的手工業者を資本のために雇用することができず、膨大な産業予備軍が周辺資本主義に形成されることである。周辺資本主義を特徴づける膨大な産業予備軍の形成と影響に最初に注目したのはすでに指摘したようにアリギであるが、アミンはこのアリギの説を非西欧的原蓄論の核心的要素のひとつ高く評価する¹⁰⁾。膨大な産業予備軍の恒常的な存在は、中心部向けの輸出セクターに低賃金労働者を供給するプールである。本源的蓄積の第三のメカニズムは、帝国主義段階における中心部からの資本輸出が周辺資本主義にあてる抑圧的な影響から構成される。中心部の資本輸出は、周辺部の膨大な産業予備軍を源泉とする低賃金労働者を利用して、中心部の経済発展に役立つ原料や食糧を提供する輸出セクターを創出する。その結果、周辺資本主義は、輸出セクターや商業や軽工業への偏向によっ

10) アミンは『世界的規模における資本蓄積』の中で、フランクの「低開発の発展」論やエマニュエルの不等価交換論と並んで、アリギの周辺部における本源的蓄積の研究から大きな教訓を得た、と述べている。アミンによれば、アリギの研究はルイスの理論（労働力の無制限供給の仮定）を批判したものであり、「無制限の労働力供給」は、「市場法則ではなく、単に周辺部で実行された本源的蓄積政策」の結果なのである（Amin S. [1970] p. 116, 第一分冊98-99ページ）。

で特徴づけられることになる。そして、非西欧的本源的蓄積を構成するこの三つのメカニズムは時間的には順次作動してきたとはいえ、重要なことは、これらのメカニズムが帝国主義＝資本輸出の段階における中心資本主義の変容に照応して確立される周辺資本主義の構造を説明する論理的契機であるという点である。

アミンが以上の非西欧的原蓄論の展開を通してもっとも強調したいことは、植民地貿易による世界市場への統合や本源的蓄積の強制的手段によって、周辺部の村落共同体が単純商品経済＝単純貨幣経済にともかく転化したにもかかわらず(第一のメカニズムの作動)、なぜこの商品経済は西欧型の資本主義への移行に結果しなかったのか、という問題である。彼はこの問題をつぎのように定式化している。

「貨幣化は、資本主義的構造が出現するための絶対に欠くべからざる前提条件である。生みだされた単純商品経済は……現地資本の形成に到達するはずである。これは絶対的法則なのである。それでは、形成された資本は……〔周辺部の〕単純貨幣経済を〔中心部と同じような〕資本主義的構造に変容させることができるであろうか。もしそうであるならば、出発点の相違にもかかわらず、周辺部の到達点は中心部におけるものと同じになる。しかし、実際はそうではなかった」(Amin S. [1970] p. 254, 第二分冊20ページ)。

アミンは、中心資本主義とは異質な周辺部資本主義の形成理由を、すなわち、共同体の解体→単純商品経済→内部市場にもとづく資本主義発展という中心部で見られた「絶対的法則」が周辺部で展開しない理由を、やや平凡ではあるが、中心資本主義の競争圧力という後発資本主義国の一般的なハンディキャップにもとめている。「外国産業との競争」(Amin S. [1970] p. 255, 第二分冊20ページ)による挫折と偏向という論理は陳腐であるが、この古くさい論理が作用する問題設定がアミンのユニークな点である。

アミンの非西欧的な本源的蓄積論の特徴は、本源的蓄積の暴力的契機を使用価値生産優位の村落共同体を商品経済に転化させるための強制手段として位置

づけていることである。周辺資本主義の形成にとってもっとも基本的な条件は村落共同体の商品経済への転化であることを、彼が認識しているからであろう。この点は、共同体に属する農村民からの土地収奪、つまり、労働者から労働条件を分離するために本源的蓄積の暴力的契機を位置づけているマルクスと強調点を異にしている。アミンによれば、中心資本主義の形成とは出発点は違うとはいえ、伝統的な村落共同体の解体と商品経済の形成という資本主義の前提条件が周辺部にも出現したのである。この前提条件さえ生じるならば、中心資本主義とは異質な周辺資本主義はいわば当然の結果として構造化される。というのは、すでに一言のように、周辺部における資本主義は外国産業との競争のために、「資本制的生産様式の全面開花にいたることはない」(Amin S. [1970] p. 257, 第二分冊 22ページ)からである。周辺部の資本主義発展が抑制され歪められる結果、これまた外国産業との競争によって破滅した手工業者は資本制部門に雇用機会を見つげることができず、膨大な産業予備軍を形成するのである。さらに、周辺部の資本主義発展が抑制される結果、周辺部の資本主義は、膨大な産業予備軍を利用する輸出セクターや第三次産業に偏向せざるをえないのである。このような周辺資本主義は「低開発の発展」を余儀なくされ、中心部の支配的資本主義に従属する他はないのである。

3 生産様式接合理論の採用とアミン理論の確立

『世界的規模における資本蓄積』におけるアミンの不等価交換論は、すでに見たように、周辺資本主義に独自の膨大な産業予備軍が輸出セクターに低賃金労働力を提供することにもとづいていたが、このような理論的枠組みでは、周辺資本主義の約8億8千万人の労働者人口中の80パーセント以上をしめる7億5千万人の農民の「超過労働」が資本の価値増殖にどのように吸収されるかという問題を取り扱うことができなかった。言い換えれば、アミンの世界資本蓄積論は、彼の最初の理論的総括の試みである1970年刊行の『世界的規模における資本蓄積』や1973年刊行の『不均等発展』(Amin S. [1973])では完成されて

いないのである。彼はそれ以後の理論的展開、とくに、1979年刊行の『階級と民族』において、レーの生産様式接合理論と多元的搾取の理論を採用することによって、周辺部の直接的生産者の大多数を占める農民の超過労働が資本制の生産様式にどのように移転されるのかを解明する。レーは、注目すべき論文「農民階級から資本主義への剰余労働の移転」のなかで、資本による労働者の搾取様式と伝統的な支配階級による農民の搾取様式とが周辺部で接合されている関係を分析しているのだが、このレー論文の中でアミンがもっとも重視しているのはつぎの一節である。「伝統的な支配階級が農民階級から強奪する食糧剰余は、その価値よりもはるかに下で販売されるので、労働力の価格もまたその価値よりもはるかに低い。ブラック・アフリカでは、労働力の価格はしばしばその価値の四分の一ないし五分の一以下である。それゆえ、剰余価値率は異常に高いのである。／だが、資本がある国で一定の大きさに達するや否や、つまり、労働者階級が労働者人口のなかで一定の比率を占めるや否や、伝統的な諸生産様式から引き出される農業剰余と手工業剰余は、この労働力の再生産を保証するのに不足するようになる。したがって、労働者に衣食住を確保するためには、新しい生産様式(資本制の生産様式)に頼るか、それとも、資本主義諸国から必需品を輸入しなければならない。いずれにせよ、労働力の価格は騰貴する結果、剰余価値率と利潤率は急落する。／すべての「低開発」国において、伝統的農民階級が労働者の労働力の再生産を可能にする財の唯一の源泉である以上、労働者階級は農民階級の10パーセントを超えることはできないのである」(Rey P.-P. [1977] 46-47)。

アミンはこのレーの分析を「周辺部で超過搾取されている一人ひとりの労働者の背後に、同じように搾取されている10人の農民がいることを証明した」(Amin S. [1976], 邦訳38ページ)ものとして高く評価し、非資本制のセクターが資本制のセクターの労働力再生産費の一部を負担するというレーの見解をより一般化する。図2は、非資本制の生産様式から資本制の生産様式への価値移転の流れを示すのであるが、アミンはこの図をつぎのように説明している。

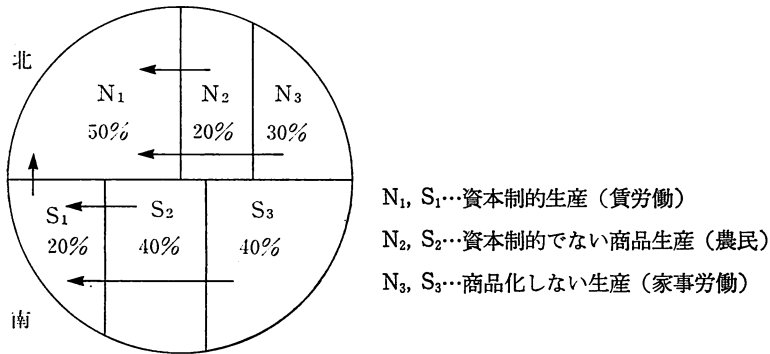


図2 流通を通じての超過労働の移転

「資本制的ではない商品生産の労働，および商品化しない生産のための労働の比率が〔純粋に資本制的な関係に属する労働と比べて〕大きければ大きいほど，資本家は，資本制的部門における労働力の価格を相対的に低く支払うことができる。なぜなら，労働力の再生産のより大きな部分が，資本制的生産の背後にあるもの，すなわち，小規模な商品生産および家庭内の生産によってまかなわれるからである」（Amin S. [1981]，邦訳18ページ）。

見られるように，アミンは中心／周辺間の不等価交換の根拠を，つまり，同一生産性にもかかわらず周辺部の賃金が中心部の賃金よりも大幅に低い理由を，『世界的規模における資本蓄積』におけるように周辺資本主義に固有は産業予備軍の法則からではなく，資本制セクターがそれに接合されている非資本制セクターの直接的生産者の過剰搾取にもとめている¹¹⁾。アミンは，レーの生産様式接合理論と広義の剰余価値論ともいうべき多元的搾取の理論をほぼ全面的に取り込むことによって，自分の世界資本蓄積論を完成させようとしたのである。したがって，1979年の『階級と民族』（Amin S. [1979]）をもって，アミンの世界資本蓄積論は確立した，ということが出来るが，このことは，アミンの思想と理論にとってつぎのような重要な意味をもっている。

第一は，アミンが世界資本主義システムの中心／周辺関係に本源的蓄積論を

11) 注5)を参照のこと。

適用するという彼独自の視角から、従属理論の三大潮流、フランクの世界資本主義論、エマニュエルやパロワの不等価交換論、レーの生産様式接合理論を総括したことである。

第二は、アミンが生産様式接合理論を取り込むことによって、世界資本蓄積論を帝国主義論として明確に規定したことである。彼は周辺部の低賃金労働者の搾取とその背後にある農民の搾取との接合という多元的搾取の理論によって、「万国の労働者、非抑圧人民よ、団結せよ」というレーニンの規定の豊富化を試みているのである。アミンはこの理解にもとづいて、帝国主義システムの主要矛盾が中心部から周辺部に移動したことを強調しつつ、周辺部で多元的に搾取されている労働者と農民の同盟による反帝民族解放闘争の観点から、帝国主義の諸局面を、第一局面(1880-1914)、第二局面(1914-1945)、第三局面(1945-1968)、第四局面(1968-)のように区分する(高橋章[1981])。アミンにあっては、世界資本蓄積論の完成と帝国主義論の完成とは同時なのである。

つぎに、アミンがこの世界資本蓄積論視角からどのような低開発性からの脱却戦略を描いているかを検討する。言うまでもなく、低開発状態からの脱却戦略は彼の社会主義論と不可分である。

4 低開発状態脱却とアミンの社会主義像

アミンは、世界資本主義システムのなかで「低開発の発展」を余儀なくされている第三世界が「自己求心的発展」を達成するための戦略として、「世界市場との切断」(Amin S. [1970] p. 60, 第一分冊 57 ページ)を提起する。世界市場との切断→中心/周辺関係からの脱却→一国社会主義への直接的移行というアミン・テーゼは、慎重に検討されるべき多くの問題点を含んでいる。すでに指摘されているように、彼の低開発状態からの脱却戦略は、あまりにも楽観的である¹²⁾。低開発状態からの脱却を考えるためには、さらに、資本主義の

12) 本多健吉 [1986] 155ページ参照。

下での生産力発展の批判と継承という問題，現行の世界資本主義システムの下で資本主義を飛び越して社会主義への直接的移行が可能かどうかという問題，あるいは，多国籍企業の直接投資によるかつてないような規模での周辺部工業化をどのように評価するかという問題などが検討されねばならない。

だが，わたしがもっとも注目するのは，使用価値と価値と対立という二極主義的な発想によって構想されている，アミンの社会主義ビジョンである。彼の社会主義ビジョンは、『世界的規模における資本蓄積』でも断片的に語られているが，それをもっとも詳しく説明しているのは『帝国主義と不均等発展』第3章にある「社会主義への讃歌」という項目である。彼はここで，つぎのような世界史の三段階把握のなかで社会主義を位置づけている（Amin S. [1976] pp. 84-96, 邦訳112-124ページ）。

使用価値の直接的把握(前資本主義的社会)

↓ 否定(使用価値の否定, 多様性の否定, 文化の否定)

交換価値と経済的疎外の支配(資本主義社会)

↓ 否定(多様な使用価値の豊かな回復)

使用価値の直接的把握の再建(社会主義社会)

このような歴史把握にもとづく「全地球的社会主義への移行」(Amin S. [1976] p. 109, 邦訳137ページ)という問題提起は抽象的な理念としては興味深いものである。しかし，使用価値支配と価値支配とを対立させる二極主義的な弁証法は，きわめて抽象度の高い論理レベルでのみ，例えば，資本制的生産様式の一般理論である『資本論』の世界においてのみ言い得ることである¹³⁾。この二極

13) 複合的な性格を強めている現代社会において社会変革を構想する場合には，抽象的人間労働と具体的有用労働との二重性にもとづく価値論のみではもはや不十分であろう。20世紀資本主義における生産力構造の複合的性格を解明できるような，新しい現代的価値論の構築が必要であろう。この点については，平田清明 [1980]，「IV 自己管理型社会主義への人間科学的接近」を参照されたい。

主義的な思考様式が社会的構成体の総体を対象とする社会変革の問題に直接適用されるならば、社会諸関係の相対的自律性と歴史的結果の偶発的で複合的な性格を無視ないし軽視するような決定論的歴史観や社会観が生まれざるをえないであろう。このような目的論的で決定論的歴史観や社会観は、アミンが継承しようとしているアルチュセールの社会＝歴史認識と対立するものである。アルチュセールは、一方では「自立的主体」という近代のイデオロギーを解体するために、構造が構造の諸要素を全面的に拘束することを強調するあまり、社会的行為主体の自律性とその選択の可能性を無視したとはいえ、他方では社会構成体の複合的性格にたいする透徹した理解をもっていたので、社会諸関係の相対的自律性や歴史的結果としての状況の複合的性格を強調しており、目的論的歴史観や経済決定論を社会認識にも、歴史認識にも適用していないのである。というよりか、アルチュセールの構造的マルクス主義の意義は社会や歴史の認識における決定論や目的論の解体にあった、と言っても過言ではない¹⁴⁾。アミンは、彼の社会主義論にかんするかぎり、構造的マルクス主義の長所よりも短所を引き継いでいるのである。

アミンは、一方で、資本主義発展の不均等かつ複合的な性格にたいする認識に見られるように、マルクスの方法や概念を使って、マルクスおよびマルクス以後のマルクス主義に見られる西欧中心主義や一国的資本主義認識を乗り越えようとしているのに、他方で、資本制的生産様式の批判理論としてのみ有効な二極主義的な思考様式で現代の社会変革を構想している。周辺資本主義構成体の異質性と複合性を強調するアミンと一元的な決定論に立脚する社会主義論のアミンとの方法的ズレ。晩年のマルクスに通じる歴史認識における複数主義(複合的・複線的発展の可能性)と未来形成における単線的で決定論的な社会主義論との対立。このようなズレと対立が、アミンの世界資本蓄積論の構造の中で無自覚なままに、無造作に併存しているのである。複数主義(複合性認識)と単

14) このようなアルチュセール理解については、Lipietz [1985], [1988a, b] を参照されたい。

線的（目的論的）決定論との対立が、アミンの思想と理論を含む従属理論全体を凋落させた最大の方法的要因であると思われる。

参 考 文 献

- [1] Althusser L. [1965], *Pour Marx*, Maspero. [河野・田村訳『甦るマルクス』（I, II）, 人文書院]。
- [2] Althusser L., Balibar E. [1966], *Lire le Capital*, Maspero. [権・神戸訳『資本論を読む』合同出版]。
- [3] Amin S. [1970], *L'accumulation à l'échelle mondiale*, Anthropos. [野口祐・原田金一郎訳『世界資本著積論』, 『周辺資本主義構成体論』, 『中心—周辺経済関係論』（全3分冊）, 柘植書房]。
- [4] Amin S. [1973], *Le développement inégal*, Édition de Minuit. [西川潤訳『不均等発展』東洋経済新報社]。
- [5] Amin S. [1976], *L'impérialisme et le développement inégal*, Édition de Minuit. [北沢正雄訳『帝国主義と不均等発展』第三書館]。
- [6] Amin S. [1979], *Classe et nation*, Édition de Minuit. [山崎カヲル訳『階級と民族』新評論]。
- [7] Amin S. [1981], Nord et Sud, *Des femmes en mouvement*, nov. 1981. [戸田清訳「北と南——発展と低開発は帝国主義的事実の表と裏である——」, 『社会運動』第22号]。
- [8] Arrighi G. [1970], "Labour supplies in historical Perspective," *Journal of Development Studies*, Vol. 3.
- [9] 馬場宏二 [1983], 「南北問題序論」, 東大社研『社会科学研究』第35巻第1号。
- [10] Brewer A. [1980], *Marxist Theories of Imperialism*, Routledge & Kegan Paul. [渋谷将・一井昭訳『世界経済とマルクス経済学』中央大学出版部]。
- [11] Chilcote R. H. [1984], *Theories of Development and Under-development*, Westview Press.
- [12] Corbridge S. [1986], *Capitalist World Development*, Macmillan.
- [13] Emmanuel A., Bettelheim C., Amin S., Palloix C. [1971], *Imperialismo y Comercio internacional*, Ediciones Pasado y Presente. [原田金一郎訳『新国際価値論争』柘植書房]。
- [14] Fank A. G. [1967], Capitalism and Underdevelopment in Latin America, *Monthly Review Press*. [大崎正治ほか訳『世界資本主義と低開発』柘植書房]。
- [15] Foster-Carter A. [1978], The Modes of Production Controversy, *New Left Review*, No. 107.
- [16] 平田清明 [1971], 『経済学と歴史認識』岩波書店。

- [17] 平田清明 [1980], 『社会形成の経験と概念』岩波書店。
- [18] 原田金一郎 [1982], 「周辺資本主義論序説」, 大阪経法大『経済学論集』第7卷第1号。
- [19] 原田金一郎 [1989], 「革命ニカラグアにおける周辺性脱却の試み」, 柳田侃編『世界経済』(ミネルヴァ書房, 所収)。
- [20] 原田金一郎 [1990], 「ニカラグア混合経済論争」, 加茂雄三ほか編『転換期中の中米地域』(大村書店, 所収)。
- [21] 本多健吉 [1986], 『資本主義と南北問題』新評論。
- [22] Lipietz A. [1985], *Mirages et miracles, La Découverte*. [若植・井上訳『奇跡と幻影』新評論]。
- [23] Lipietz A. [1988a], “Building an alternative movement in France.” *Rethinking Marxism*, Vol. 1, No. 3.
- [24] Lipietz A. [1988b], “De l’Althusserisme à la Théorie de la Régulation,” *CEPREMAP*, No. 8920.
- [25] Magdoff H. [1979], *Imperialism*, Monthly Reviw Press. [大阪経法大経済研究所訳『帝国主義』大月書店]。
- [26] Marx K. [1968], *Das Kapital*, Bd. 1, Dietz Verlag. [長谷部文雄訳『資本論』(青木文庫), 全13分冊]。
- [27] 松岡利道 [1988], 『ローザ・ルクセンブルク』新評論。
- [28] 望月清司 [1981 a], 「第三世界を包みこむ世界史像」, 『経済評論』1981年4月号。
- [29] 望月清司 [1981 b], 「生産様式接合の理論」, 『経済評論』1981年7月号。
- [30] 望月清司 [1981 c], 「第三世界研究と本原的蓄積論」, 『経済評論』1981年12月号。
- [31] 望月清司 [1982], 「本原的蓄積論の視野と視軸」, 『思想』1982年5月号。
- [32] 本山美彦 [1982], 『貿易論序説』有斐閣。
- [33] 森田桐郎 [1979], 「段階的画期としての現代」, 『世界』1979年12月号。
- [34] 森田桐郎 [1980], 「世界経済の現段階」, 森田・本山編『世界経済論を学ぶ』(有斐閣, 所収)。
- [35] 室井義雄 [1984], 「『接合理論』に関する覚書」, 専修大学『経済学論集』第18巻第2号。
- [36] Ominami C. [1979], *Aperçu critique des théories du développement en Amérique Latine, Revue Tiers-Monde*, XX-No. 80.
- [37] Ominami C. [1986], *Le tiers monde dans la crise, La Découverte*. [奥村和久訳『第三世界のレギュラシオン理論』大村書店]。
- [38] Polychroniou C. [1991], *Marxist Perspectives on Imperialism*, Praeger.
- [39] Rey P.-P. [1973], *Les alliances de classes* Maspero.
- [40] Rey P.-P. [1977], “Le transfert de surtravail de la Paysannerie vers le capitalisme,” *L’Homme et la Société*, N°s 45-46.

- [41] Ruccio D. F. et Simon L. H. [1986], Methodological aspects of a marxian approach to development, *World Development*, Vol. 14, No. 2.
- [42] 高橋 章 [1981], 「新従属理論の近代世界観」, 『歴史評論』1981年10月号。
- [43] 若森章孝 [1979], 「新帝国主義モデルと階級理論」, 『経済評論』1979年9月号。
- [44] 若森章孝 [1980], 「資本の国際化の経済学批判」, 『経済評論』1980年3月号。
- [45] 若森章孝 [1982], 「資本循環論と生産様式接合の理論」, 関西大学『経済論集』第32巻第1号。
- [46] 若森章孝 [1992], 「資本制システムの連続性と可変性」, 関西大学『経済論集』第42巻第1号。
- [47] 山崎カヲル [1980 a], 「生産様式の節合と帝国主義の理論」, 『季刊クライシス』第5号。
- [48] 山崎カヲル編訳 [1980 b], 『マルクス主義と経済人類学』 柘植書房。